

の適用まだ十分ならざる日本、支那、その他の東洋に關してをや。この方面に於ては、新に第二のMGHや、新に第二のランケやの出現が當然に願望されるべきことではなからうか。

歐米の古文書館

(中の一)

文學博士 三浦 周 行

五 古文書の保存

古文書館に於ける古文書保存の狀況を知らうとするには一應古文書館の建築についての概念を得て置くを便宜とする。古文書館の建物はこれを大別して在來の古建築物を流用したものと其固有の建築物との二つとすることが出來やう。前者が伊太利、佛蘭西の如き、文化の淵源の古い國々に多く存するに反して、後者が其他の邦國に見らるゝのは面白い對照である。私の屢訪した歐米の古文

三 史 林 大正九年一、四月號
四 藝 文 大正三年一月號
五 ランケ全集 第五十四卷

書館の中では、先づローマのワチカノ法王廳の古文書館は、彼グレゴリオ曆の創製者たる法王Gregorio十三世の觀象臺等を含んだ古建築を利用して居る。エネチアの國立古文書館はS. Maria Gloriosa dei Frariといふエネチア切つての宏大壯麗なるゴシック式のフラシスコ派敎會堂の隣にあるが、これももとはS. Nicoletto della Lattungaといふ敎會堂と舊僧院とであつた。パリでは別して重なる公共的建造物に王朝時代の古建築の利用

されつゝあるを見懸けたが、國民古文書館の如きも亦 Louis 十六世の大臣であつた *Count de* 公の舊第であつたのを、破産後政府の所有に歸して、千八百八年 *Napoleon* がこれを古文書館に充てたものである。

古文書館固有の建築は歐米到る處に見出ださるゝが、ロンドンの古文書館はチャンセリー・レーンの物靜かな横町に沿うて聳つたチュードル式の大建築で、見るからにゆかしくも又ふさはしくも思はれた。亞米利加は迨に開國が新しく、且つ財力に富んで居る上に、宏壯で行届いた氣持のよい建築もないではなかつたが、それでも和蘭のハーグの國立古文書館の最新式な建築を凌駕する程のものは私の遍歴した何處にも見出だし得なかつたのである。

古建築を流用したものは、もとより古文書館の目的に副はぬ點がないではないから、採光其他の

設備について完全を求むることの困難なる事情あるを免れぬ。プチカノの古文書館の如きは代表的のものといへやう。私は館長 *Cardinal Gagneur* 師の案内で、仔細に館内を巡覽したが、階下の閱覽室は晝尚ほ薄暗く、古文書を納れた箱棚は、階下はもとより、幾階かの階上こゝかしこに所狭き迄に置かれて、それらを取り出だすのは容易の事であるまいかと思はれ、而かもその階段は二人と並んで昇降の出來ぬ程狭く、ともすれば脚に纏はる僧服を着けて、いきせき乍ら先に立つ老館長を氣の毒に思つたが、迨に其最高樓に昇りつめて、ローマを一眸に收め、コンスタンチヌス大帝の古戰場其他の史蹟を望み乍ら、脚下に法王が毎日時を定めて逍遙するといふ庭園を俯瞰した時は、頓に心氣の爽快を覺えたのである。

此古文書館と隣接した圖書館は千四百五十年の創設であつて、現在の建物は千五百八十八年に竣

成したものであるが、古文書館はそれより遙に古く實に四世紀の古建築といはれる。パリの古文書館は十九世紀以後の建増もあるが、重なる部分は千七百六年から十二年にかけて出来たものであるから、二百年以上の古建築である。私は今一々それら全部の詳説に代へて、私の歐米に於ける古文書館訪問の最初のもので最も深き印象を受けたパリの Archives Nationales についての觀察を少しく書いて見やう。

此古文書館はセーヌ河の北、パリの中央よりは少しく東寄の其名もふさはしい Rue des Archives にある。此邊は古バリ其儘かと覺しき程道幅も狭く且處々に現代放れた古建築が取殘されて居るが、入口高く國旗を掲揚して居る此古文書館も、一見して其歴史的の遺物である事が知れる。門を入ると、右側に受附があつて、門衛の夫婦らしきが案内書及館内列品の繪葉書を賣つて居る。階上の

館長室を始め事務室杯皆此建物に置かれて居る。

正門を入つて左右の庭園を見乍ら歩を移せば、突當りが二階建の本館で、其清楚なる建築は十八世紀初期の佛蘭西貴族の邸宅を偲ぶに充分である。正面に閱覽室がある。閱覽室のことは後項に詳しく説かう。其隣が能く閱覽に出でる古文書を假りに納め置く室である。次の繪額を掲げた一室が昔 Soubise 公の居間で、其隣の天井より美事な飾硝子の垂れた一室が音樂室であつた。こゝはもと長い間 Foote des Chartes の教室に充てられて居た爲め、壁間の裝飾を惜氣もなく截取つて書棚をしつらへた痕跡が今尙ほ歴然と殘つて居る。此室の中央の長き几は、佛蘭西を八十七縣に分けた最初の地圖が此几上で描かれたとかで著名である。聞いた。次が特別室であつて、一面に佛蘭西の現存せる貴族諸家の古文書とか、海軍省の古文書で、閱覽には大臣の特許を要するが如き通常閱覽

を許さぬ者の特別閲覧室であると共に、他面には

又古文書館の目録やカードの室ともなつて居る。

夫から奥が階下から階上にかけて古文書の書庫である。大體窓に面した凹間が書架で仕切られて居るが、其數百三十八に達して居り、壁に沿うて通路がある。天井が高いから、六段計の書架の上に更に略同じ程の書架を重ねて、其間に欄干附の通路を設けたもの、通路のない代りに、下から高い梯子を寄せかけたもの、何れも空間といふ空間は巧みに書架の置場を利用して居り、それらの書架は古文書を本に綴ちて立てたもの、箱に入れて横にしたもので満たされて居る。階上の書庫を出でると古文書の陳列室となる。そこには七つの室があつて、此古文書館に於ける各種の代表的な古文書が大小の硝子箱又は壁間に陳列されて居る。陳列品中には古文書の外に舊硬貨の如きも交つて居るが、それには文字が鑄出だされて居るからであらう。

私はバリ滞在中、普通の觀覽人として數回この陳列室を見舞つた外に、始めてバリに着いてからと、ロンドンより大陸旅行に出でた歸途とに館長 Langlois 教授を館長室に訪ひ、書庫内も一度は館長、一度は館員の案内で前後二回仔細に見學を遂げたのである。始めてラ館長に逢つて此古文書館の説明を聞いた後、私は本館の特色について質して見たが、老館長は笑つて、貴下はこれより歐米到る處で同様の古文書館を訪はるゝであらう、本館には別にそれらと異つた點とてはないが、若し強ひて言へば、佛蘭西の王朝時代から革命、帝政、共和の各時代を通じて、其古文書を藏する一事であらうと答へられた。館長は猶ほ同國に存する古文書の最古のものは八百年前のものであること、個人所藏の中には随分古いものもあるけれども手放さないこと杯を物語られた。個人所有の

外にも、他の博物館杯で、一例へば Musée Carnavalet の、別けても革命時代の古文書の如き——保存されて居る古文書も少らぬことは私の親しく目撃したところであつて、佛蘭西殊に其首都に於ける古來幾度かの兵燹にも失はれずに、よくもこれ丈のものが残つたことよと驚歎せざるを得なかつた。

併し私は其後現太利から伊太利に入つて、エネチアの國立古文書館の書庫を觀覽した時は、其結構の宏大で、集藏の豊富なるには一驚を喫したのである。こゝは一貴族の舊第に過ぎないパリの古文書館とは違つて、名だゝる大敎會堂と僧院とをたもの丈に、書庫内も頗も寛濶であつて、天井は高く、書架を立て並べた多くの凹間はそれぞれに區劃をなして居るが、同じ凹間といつても、パリの古文書館のせゝこましいのとは違つて非常に手廣く、其壯觀は堂々と觀覽者を壓して居る。

茲にはエネチアの古代から降つては千八百六十六年迄の古文書が收められて居り、陳列品の中では八百八十六年の者を見懸けたが無論其大多數はエネチアの黄金時代ともいふべき共和時代の古文書である事言ふ迄もない。十字軍の結果として他の市府諸共偉大の發達を遂げたエネチアが、猫額大の地を擁し乍ら、金權を握つて列國と交際しつゝあつた時代の皇帝、法王、王、ドージェ等の自筆に富んで居る事は、其陳列を見ても解るが、夫にも増して彼フイレンツエと共に外交術の母といはれた當時のエネチアから世界の諸國に派遣された外交官達が、其洗鍊された得意の外交術を揮つて偵知した各駐劄國の國情についての精選なる報告が、此エネチアの國立古文書館をして他の追隨を許さぬ世界獨歩の者としたのである。パリの國民古文書館所藏の古文書は今尙ほ全部のカードが取れて居ないので、もとより正確なる數字を擧げ難いが、

無慮六十萬通以上といはれて居る事既記の如くであるのに、エネチアの國立古文書館では實に三百萬通以上を算するを見ても、其蒐藏の如何に潤澤であるか窺はれやう。(我伊藤滿所一行及び支倉長經の書狀を含む事言ふ迄もない)尤もバリの古文書館は前章に説明した組織を以て逐年其數を増す一方であるから、將來エネチアのそれを凌駕する時期の到來すべき事勿論である。

只是等の古建築流用の古文書館は其内容は兎に角設備萬端初めより古文書館として設計された新建築に一籌を輸するを免れぬ。新建築といつても、ロンドンの Public Record Office の東部は千八百五十一年から六十六年にかけて建てられたもので、既に六七十年を経て居るが、是等の古建築に比べると、天井は概して低く、書架の本も手を延ばせば取り出すに容易となつて居る。これに反して是等の古建築は前に説いたやうに天井が高

く、書架の上に書架を重ねてあるから、縦ひ其半ばを仕切つて欄干附の通路を設けた場合にも、低い乍らに梯子を掛けねば上の方の本を取出し難く、さもない場合は、高い／＼梯子は是非必要となつて、檢索の不便言ふばかりなのである。而かも天井を高くするは室内の美觀を呈せんが爲めであつて、又これを低くするは實用的に外ならぬ。古文書館といはず、圖書館とはいはず、階數を多くして天井を低くするのが最新傾向と見られる。前記佛蘭西及び伊太利の古文書館は古建築を利用したものであるとはいへ、是等の國民の別して美術的なるに對して、英吉利國民の實用的なる國民性の相違が、此古文書館の設備の一端に表現されて居るかと思ふと、興味を感じる。

是等の固有の新建築の中でも、思切つて新しい設計から成つたものはハーグの Rijks-Archief であらう。素人眼には鐵と硝子とスレートとから出

來て居るとしか見えぬ。鐵筋コンクリートから成る此古文書館は屋根も床も皆硝子であるから明るくて暖いこと此上なく、書架には鐵や木の代りに滑りのよいスレートが横たへられ、それには本の大小等に依つて自由に上げ下しの出来る設備もしてある。階段等の通路にも亦スレートが敷かれて居る。地圖杯を納れる書箱は鐵で作つて内部の棚は引出せるやうになつて居るが、鐵板へ直接に載せては本を傷めるから、ボール紙を敷いた上に載せる。驚くべきは火災とか屋根の硝子を毀すやうな雹の降つた場合、咄嗟に屋根はもとより階下の天井となつて居る床全部を鐵で掩ふ設備のあることである。此書庫は全體で六階（日本流では七階）であるが、本の上げ下しはすべてリフトであるから便利であるばかりでなく、其間一寸書見をする爲めにリフトの左右にアイヨン、テーブルを挟めるやうな設備もある。窓の數は總體で百九十八も

あるが、其窓の開閉、途中で締めることの何れも自由であること杯、一つとして私の目を驚さぬものとはなかつた。

副館長 Dr. Jde Hullu 氏の案内に依つて書庫内各部の施設を見學した私は更に此建築が起工後三四年の歲月を経て千九百三年に竣成したとの説明を聽取つた。經費の點は姑く別問題としても、地震や火事の多い我國に、直に此設計を採用するは不可能であらうが、専門家の目から見ただけの中或は部分的に應用すべき者もないではなからうかと、更にホ氏に質して、本館の建築設計者たる W. Schlusen 氏の De Hydraulische Veiligheidsinrichtingen van het Algemeen Rijks-Archiefgebouw te 's-Gravenhage. と題する報告が雑誌 De Ingenieur の第三十八號（千九百三年）に掲載されて居ることを知つたから、私のハীগ滯在中同地の書肆をあさつた時にも注意したけれども、不幸にし

て手に入れることが出来なかつたが、其後同地の日本公使館の島田互氏が私の爲めに捜し出されて、私がロンドンで大陸旅行の旅装を解いた頃、態々郵送されたのは、私の深く同氏に向つて感謝するところである。此報告には建物の全部及び各部の精緻なる圖面を挿入して一々説明を加へてあるから、我建築専門家を裨益すること定めて多からう。私は何程か我將來の圖書館建築上に寄與するものゝ其中より出でんことを切望して己まざるものである。

さて是等の新舊古文書館を通じて、其管理者の最も恐るゝところは、祝融子に見舞はるゝ一事に外ならぬ。一朝火災に瀕した場合に鐵板を以て掩ふ特殊の設備を有するハーグの古文書館は格別として、案外舊式なベルリンの國立古文書館ですらも、火災のさし迫つた場合には頑丈な鐵の窓を更に内部より鐵戸を以つて掩ふ仕組があつた。私の同館を見舞つた日は Direktor : Dr. Klinkenborg 氏が缺勤中であつた爲め Vertreter : Dr. Müller

より残る限なく書庫内を案内されたが、本館の防火設備の事に言及した氏は、つと窓際に歩を移して、垂下した紐を手にし乍ら輕々と大きな鐵戸を引いて見せられた。

是等の古文書館の中には事務室と書庫とを別棟とするもあるが、又同一の建物でも、區劃を立てゝ隔離するやうにして居る。古文書の修補をも取扱つて居る大英博物館の製本所が平生火氣を絶やさぬ爲めに、立派な獨立の建物として本館から隔離されて居たのは、私の歐米を通じて他に餘り見かけなかつたことで、遠に用意の周到なるに敬服した。事務室に於ても、閲覧室に於ても喫煙杯もとより許されない。矧して書庫内には防火設備は言ふ迄もなく、電燈も引かねばスチームも通さないところがある。パリの古文書館の如きも夜間は閉鎖さるゝが、其間守衛は電氣や種油のランプを使用することになつて居ると聞いた。(本章未完)